

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 15 日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520844

研究課題名(和文)『新撰年中行事』の基礎的研究 東アジアにおける年中行事・歳時記の受容と変容

研究課題名(英文)The basic reserch of Shinsen-Nentyugyoji; the reception and transformation of yearly court functions in east Asia

研究代表者

西本 昌弘(NISHIMOTO, Masahiro)

関西大学・文学部・教授

研究者番号：00192691

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：藤原行成撰『新撰年中行事』は多数の行事項目を掲載し、未知の関係史料を引用しているため、既知の年中行事書と対比検討することによって、日本古代の年中行事研究に新たな手がかりを提供する可能性を秘めている。本研究では、『新撰年中行事』と『小野宮年中行事』の記載を比較する対照一覧表を作成し、検討を進めた。両書の類似点はともに『九条年中行事』を踏まえていることに求められよう。『新撰年中行事』は弘仁式など古くに遡る史料を博搜して、行事の淵源を探る視点が強いため、『小野宮年中行事』とは大きく異なる本文をもっているものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：Shinsen Nentyu-gyoji selected by Yukinari Fujiwara has many evennts and q uotes unknown documents. So it hides possibility to suggest new clue to the study of yearly court functions of Japanese ancient time by comparing with known a book on yearly court f unctions. In this study, we made a contrast table to compare mentions between Shinsen Nentyu-gyoji and Ononomiya Nentyu-gyoji, and processed examinations. Both books are based on Shinsen N entyu-gyoji.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：新撰年中行事 藤原行成 小野宮年中行事 年中行事書 綿書 弘仁式 荷前別頁幣

1. 研究開始当初の背景

(1) 平安時代の公卿・藤原行成が編纂した『新撰年中行事』上下二巻はすでに散逸したものと考えられていたが、1995年、申請者らの調査により京都御所東山御文庫に伝存することが確認され、その概要は1998年に学術雑誌に発表された。その後、申請者は校訂と検討を重ねて、2010年に『新撰年中行事』の全文を翻刻・刊行した。この新史料を網羅的に分析し、『九条年中行事』『小野宮年中行事』など既知の年中行事書と対比的に検討することで、日本古代の儀式研究に新たな可能性を開くことができると考えた。

(2) 日本古代の年中行事や歳時記の研究は近年活況を呈しており、中国における歳時記研究の深化と相まって、東アジアにおける文化交流・文化交渉の実態が次第に明らかになってきている。こうした動向のなかに位置付けながら、『新撰年中行事』の全面的な活用をはかることが急務であると思われた。具体的には、古代の中国や朝鮮における年中行事と日本の年中行事を比較検討することで、従来の研究を一歩でも進めることができるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、『新撰年中行事』、『行成大納言年中行事』、東山御文庫本『日中行事』などの新出史料を利用しながら、まずは、日本古代の年中行事・歳時記について、その具体相と変遷を見直す作業を行う。藤原行成の手になる『新撰年中行事』の本文は、従来から藤原資実が編んだ『小野宮年中行事』の本文と類似することが指摘されていた。そこで、二つの年中行事書がどのような影響関係のもとに成立したのかを考察する。年中行事や儀式の変遷の背景には、当該時期の政務方式や行事運営の問題が存在するが、そうした問題についても、摂関政治期の政務形態などを踏まえながら、一定の見通しを立てることをめざした。

(2) 中村喬氏や中村裕一氏の研究に代表されるように、中国における年中行事・歳時記研究は、近年活況を呈している。ただし、日本における年中行事の淵源を東アジア史のなかで追究する研究は、かつての山中裕氏の研究以来、近年の丸山裕美子・劉曉峰氏らの研究にいたるまで、きわめて数少ない状況で、何らかの改善策を模索する必要がある。『新撰年中行事』には新出史料を含めた漢籍がいくつかが引用されており、日本と中国における年中行事の継受関係を考え直す新たな手がかりが出現したといえる。本研究では、これまでの研究成果を踏まえて、中国歳時記・類書などの記載を参照・検討しながら、日本の年中行事・歳時記の淵源について考察を深めてみたい。

3. 研究の方法

(1) 『新撰年中行事』と『小野宮年中行事』の項目対照表を作成して、二つの年中行事書類似点と相違点を確認することで、両書の影響関係を明らかにする。そのためにまず、宮内庁書陵部・京都御所東山御文庫・国立公文書館・国立歴史民俗博物館などに出張して、『小野宮年中行事』の諸写本を調査し、どの写本がもっとも善本であるのかを見極めた上で、群書類従本の誤りを正し、信頼できる本文の復原をめざす。

(2) 調査の対象とする年中行事書・歳時記は以下のものを考えている。『新撰年中行事』、『行成大納言年中行事』、国立歴史民俗博物館所蔵廣橋家旧蔵本『叙除拾要』、東山御文庫本『日中行事』、『小野宮年中行事』、『撰集秘記』、『内裏儀式』、『内裏式』、『延喜式』、『政事要略』、『西宮記』、『北山抄』、『江家次第』、『新儀式』、『蔵人式』逸文、九条家本『神今食次第』など。以上の諸本の多くは、活字本が存在するが、できるだけ善本の写本を参照して検討を加え、活字本がないものに関しては、紙焼写真を購入することとする。

(3) 『新撰年中行事』が引用する新出の漢籍史料を中心にして、従来の中国年中行事・歳時記研究の成果と突き合わせ、新たな視点から、東アジアにおける年中行事・歳時記の継受関係・影響関係を見直す作業を行う。とくに元日朝賀をはじめとする節会行事は、古代の日本が早くから導入した中国的行事であり、元日朝賀の成立過程を日本国号の成立問題とも関わらせながら、検討することにした。

4. 研究成果

(1) 宮内庁書陵部・国立公文書館・国立歴史民俗博物館などに出張し、日本古代の年中行事書を中心とする写本類の調査を進めた。出張調査の結果、参照すべき必要性を感じた写本類は、これを紙焼写真の形で購入し、その内容に関する読解を順次進めた。『小野宮年中行事』の写本は精力的にこれを収集し、写本系統を究明して善本を見出す努力を行った。その結果、『小野宮年中行事』の諸写本のなかでは、東山御文庫本(勅封144-5)、宮内庁書陵部所蔵の鷹司本(266-670)、葉室本(葉-1307)などが善本であることが判明したので、群書類従本『小野宮年中行事』の本文をもとに東山御文庫本・鷹司本・葉室本などによって校訂を加え、正確な本文を復原するよう試みた。

(2) 『新撰年中行事』所載の行事項目と『小野宮年中行事』所載の行事項目を比較するために、マイクロソフトエクセルを用いて対照一覧表を作成した。両書は類似した行事項目をもつが、その相違点も大きく、その相互関係を細かく考察した。考察を進めるにつれて、

両書の間係を見極めるためには、『九条年中行事』との間係を分析する必要があることに気づき、三書の間係を相互に検討した。その結果、『新撰年中行事』と『小野宮年中行事』はともに『九条年中行事』を踏まえて編纂されており、とくに『新撰年中行事』は『九条年中行事』の新訂増補版という意味で「新撰」を書名に冠しているのではないかという仮説に想到するに至った。

(3) 『新撰年中行事』を中心とする新出の年中行事書・儀式書に関して、私がこれまでに公表してきた研究成果を集成して、『日本古代の年中行事書と新史料』(吉川弘文館、2012年2月刊)を刊行した。このなかには、新稿が二本含まれている。一本は「古代史研究と新史料 東山御文庫本と九条家本を中心に」であり、『新撰年中行事』を現在に伝えた東山御文庫や、宮内庁書陵部の九条家本から発見・確認された新史料の概要と、未知の史料から判明する新たな歴史的事実についてまとめた。いま一本は「九条家本『神今食次第』所引の「西記」と二代御記 行幸時の鈴印携行とも関わる新史料」であり、九条家本『神今食次第』が引用する「西記」「醍醐天皇御記」「村上天皇御記」などの新出逸文を紹介し、古代における行幸時の鈴印携行の原則について考察を加えた。

(4) 本研究に伴う主張調査の際に、東山御文庫において『除目抄』(勅封 153-12)という写本を閲覧した。この写本と同様の本文をもつ内閣文庫本『除目抄』については、時野谷滋氏や細谷勲資氏が検討を加えているが、田島公氏の最近の研究によって新たな手がかりが指摘された。田島氏の指摘を参照し、新たな徴証を追加・検討したところ、本写本は源師時が院政期に編纂した大部の除目書『綿書』の一部ではないかという結論に達した。本写本『除目抄』は、『綿書』を構成する一巻たる「職事撰申文事」の伝本であると考えられる。

(5) 『新撰年中行事』所引の荷前別貢幣に関わる二条の推定「弘仁式」逸文に検討を加え、これらは弘仁太政官式の逸文と考えてよいこと、これら二条の逸文から、弘仁年間(810~824)前後の荷前別貢幣のあり方をうかがうことができることを述べた。こうした事実を勘案すると、荷前別貢幣はすでに延暦年間(782~806)には成立していたとみる学説の方が成立する可能性が高いということになる。中国の先帝祭祀の方式を踏まえて、平安時代に入る頃には、とくに重要な近親陵墓には手厚い祭祀が施されていたと考えることができる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計11件)

西本 昌弘、空海請来不空・般若新訳經の書写と公認 一代一度仁王會の成立とも関係して、原田正俊編 日本古代中世の仏教と東アジア、査読無、2014、127-151

西本 昌弘、『新撰年中行事』所引の荷前別貢幣に関わる推定「弘仁式」逸文、関西大学文学論集、査読無、2014、63巻4号、51-71

西本 昌弘、藤原行成 道長の栄華を支えた多芸多才の官人、週刊朝日百科新発見!日本の歴史、査読無、15号、2013、7-7

西本 昌弘、「菓子の変」か?「平城太上天皇の変」か?、週刊朝日百科新発見!日本の歴史、査読無、13号、2013、22-23

西本 昌弘、祢軍墓誌の「日本」と「風谷」、日本歴史、査読有、779号、2013、88-94

西本 昌弘、古代都城と神・仏・天の祀り、都城制研究、査読有、7号、2013、65-75

西本 昌弘、菟原・雄伴・八部三郡考、森岡秀人さん還暦記念論文集 菟原、査読無、2012、759-769

西本 昌弘、平安時代の除目書『綿書』の一伝本、関西大学文学論集、査読無、61巻4号、2012、1-22

西本 昌弘、建王の今城谷墓と酒船石遺跡、続日本紀研究、査読有、396号、2012、1-15

西本 昌弘、齊明天皇陵の造営と修造 建王・間人女王・大田皇女の合葬墓域として、古代史の研究、査読無、17号、2011、1-25

西本 昌弘、高市大寺(大官大寺)の所在地と藤原京朱雀大路、古代文化、査読有、63巻1号、2011、45-64

[学会発表](計5件)

西本 昌弘、大藤原京説批判、第335回研究集会、檀原考古学研究所、2014年1月12日

西本 昌弘、平安時代の難波と難波津、シンポジウム大阪上町台地から都市を考える、大阪歴史博物館、2013年12月22日

西本 昌弘、空海『文鏡秘府論』の撰述理由と成立年代、国際学術会議「近代における中国と世界の相互認知 内藤湖南と中国」、中国天津・南開大学、2013年9月8日

西本 昌弘、日出処の元日朝賀と銅烏幢、共同研究「日本的時空間の形成」(研究代表者 吉川真司)、国際日本文化研究センター、2013年6月15日

西本 昌弘、文献史料からみた川原寺、国際シンポジウム「飛鳥・川原寺裏山遺

跡と東アジア』、関西大学、2012年12月
15日

〔図書〕(計3件)

西本 昌弘、同成社、飛鳥・藤原と古代
王権、2014、224

西本 昌弘、山川出版社、桓武天皇、2013、
91

西本 昌弘、吉川弘文館、日本古代の年
中行事書と新史料、2012、356

〔産業財産権〕

出願状況
なし

取得状況
なし

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西本 昌弘 (NISHIMOTO Masahiro)
関西大学・文学部・教授
研究者番号：00192691

(2) 研究分担者

なし